

小十郎と千代 (6)

松永ひろし

2023.6

大猫	1
その名はトラ	2
トラは年寄り	3
待ち伏せる	4
あるいは化け猫	5
また雪が降った	7
ふつくら雀	8
来た!	9

大猫

正月三日。曇るから吹き出した北からの風は、やがて雪まじりとなった。雪は大きさをましてほぼ一晩中降り続き、翌四日の朝には、齋藤又右衛門宅の庭先でも五寸ほどに積もってやんだ。東につらなる家々のかなたから朝日が顔を出すと、雪景色の江戸の町の上に雲ひとつない青空が広がった。

朝めしをすませた五歳の千代は、雪ぐつをはくと玄関の障子戸を開けた。目の前には、まばゆいまでの白い庭。一步、二歩と歩き出て、足元の雪を手ですくって丸めると、雪をかぶったナンテンの株を目がけて投げた。雪玉はほそい茎に力なくあたって二つに欠けて落ち、落ちたわきの雪の上に、ポツポツポツと一寸大の凹みがじくさぐくに続いていた。

(「ね」のあしあとだ。くろかな ぶちかな)

クロもフチも、近所をうろつく野良猫だが、どこぞに餌をあたえる者があるらしく、人になれ、からだの肉付きもよい。

一匹が屋敷の庭に顔を出すと千代は、母に内緒で、勝手の壺から煮干しを二つほどつまみ出しては与えよう。

「ニャアー ニャアー」

千代は猫の鳴き声をまね、あたりを見回した。だが、動くものはない。雪に残る足跡は、表の街道から庭に入り、池の南を通り、屋敷と道場を区切る板塀の下をくぐっている。

千代は横木戸をあけて道場の庭に入り、周囲をさ

ぐった。と、見越しの松の太い横枝に伏す、大きな山吹色のけものを見つけた。

(「なんだ? ン、ね? 二ぶたほともある)

千代は大猫を見上げ、

「おい、おまえは どのねこだ。あたいは おまえみたいな でぶつちよは きらいだ。のるまだから いらいらするの」といった。

すると大猫は身を起すや、パツと一間ほど南の塀の上に跳び移り、「チリン」と二つ、軽やかな鈴の音を残して塀の向こうへ消えた。まるで、千代の言葉をあざわらうような振る舞いに、千代は、フンと鼻を鳴らした。

その名はトラ

「お千代さま、そいつはトラだ。トラにちげえねえ」
又右衛門道場の松にいた大猫のことを千代から聞いた奉公人のたねはすぐに応えた。

「金剛寺の猫でござえます」

「「ん」は、あのこと「う」か」

「はい、天誓和尚さまの金剛寺です」

「これまで、いくとも、ほんとうじにいったが、あのついな、ねこは、みたことないぞ」

「トラは、昼間、寺の奥座敷で寝てましてな、暗くなる寺を出てあちこち歩きますだ」

「たねは、とらと、であったことがあるか」

「なんどもいせえます。先年は、お千代さまが宵に熱を出され、おらが玄庵先生をお迎えにいっただとき、あつをついてきました」

「それが、トラだと、なぜいえる？」

「鈴です。トラは首にいい音色の鈴をつけてます。うしろからその音がしたのです」

「すずのおもひがする」と、とらなのか」

「はい。猫という生き物は首に鈴がついていても、ふつうに歩くだけなら鈴は鳴らんもんです。首がゆれねえ歩き方をすることでやす。でもトラは、歩くとき、わざと首を振って鈴を鳴らすんです。』おトラさまが通るぞ』って。トラはそついう猫なんでやす」

「あつをつけられて、わくはなかったか」

ついできた。千代は五つ。ときおり小十郎に無理難題をいう。

手を後に組んで、千代が小十郎に訊いた。

「じいぢのうんは、とらと、うん、とらと、うん、の、ねこを、うしてあるか」

「山吹色の大きな猫ですね。夕刻の町なかで時折みかけます。トラがぶつかしましたか」
「おとこのあな、その、まつのきのうえにいてな。ちよが、ぶつちよの、のろまなねこは、きらいじゃと、いつたり、まるで、ちよのことばが、わかつたみたい、すばやくたちあがつて、すがたを、けしたぞ」

「かけたことばが分かったのかもしれませんよ。年をとつた猫は、人さまのいつことが分かるそつです。トラはだいぶ年寄りです」

「そんなに、とじよりの、ねこだったのか」

「わたくしが五つとき、両親に連れられ、金剛寺に七五三の祈禱をつけに参ったとき、奥座敷で大きな体のトラが寝そべつておりました。ですから、十五は超えているはずす」

「怖くはないです。逆に、トラがおれば野良犬が近つかないので、安心でいせえやす」

「うちは、のらいぬやり、しよいのか？」

「ぶつちよですが、動きが素早いです。三匹の野良犬に囲まれたところを見やしたが、犬がちかづく前脚で犬の頬をなぐり、犬が噛みつかんと大口あけると、自分も大口をあけて威嚇してからバツと跳んでその犬の鼻を噛んだでやす。犬は尻尾をまいて逃げやした」

千代は先日のトラの素早い動きを思い出し、なるほどそうにちがいないと思った。

トラが人の言葉をわかるかどうか、たねは知らぬといった。(よし、トラに出あったら、たしかめよう)と千代は心に決めた。

トラは年寄り

十九歳の剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場の代稽古を終え、はねつるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近

「じいぢのうんは、ちよは、とらを、もつと、しりたくなつたぞ。おつたら、すまのことがわかるのか、きいてみたい」

「おすねは、金剛寺にまこりますか」

「とらひ、ひるま、とらのせいきで、ねているそつじゃ。はなができんかもしれん」

「ならば、外に出た時といたしまじょう。小十郎は、荒木清右衛門さま道場の代稽古を終えますと、明神町の七福の湯で汗を流します。その後、三間堀のやなぎ端を通り家に帰りますが、その場所たびたびトラと出あいます。いかがでしょう、やなぎ端でトラを待ちまじょうか」

「おもしろい。とらをまちぶせるのか。いつかきたい、いきゅつさんの、とんちはなしみたいじゃな。ん？、ちよと、ちがうな」

「いつて千代がペロツと舌を出した。」

待ち伏せる

「井あ、三間堀のやなぎ端でトラを待ち伏せるので

すか。あの大猫を」

喜々として話す千代に、母の千鶴はあきれた。そして、「待ち伏せていかがするつもりです」と尋ねた。千代は得意げに応えた。

「ちよのことはを とらが わかるかどうか、ためてみます」

「いかなうついでに試すのですっ」

「おて。おまわり。ふせ、なごです」

「犬ならまだしも、猫がお手とか伏せとかやるものですか。猫は生来、根っからの風来坊、遊び人なのです」

「ははづえならば どのようにな こんがけ いたしますか」

「トラよ、おまえはどこへ行くつもりじゃ。いかなる用があるのじゃ、ですかね」

「ちよは とらが ひとのことはを しゃべるとはおまえませど」

「ならば、トラよ、おまえがこれから行くところ、千代をあないせよ、とか」

「とらが やねのつえを あるいたり、へいのした

を くぐつたら ついていけませぬ」

「よわかりましたね。なら、すなおに、」トラよ、千代の言葉が分かるのか』と訊いてみたらどうでしょう。にやあ、と返事したら分かるのでありましょう」

八つ半過ぎ。桜木小十郎が齋藤又右衛門宅に千代を迎えに来て、二人はつれだつて三間堀添いのやなぎ端に向つた。

やなぎ端は名のとおり、枝垂れ柳が堀に添つて一町ほど続く。枝垂れ柳といえは幽霊だといつてよく、子どもたちの間では幽霊端とも呼んでいる。千代もその名を知つてはいたが、いまは小十郎が一緒なので怖いとは思ふ気持ちは起こらなかつた。

暮れ六つの鐘の音が紺青の空にひびいた。千代は柳の枝垂れに隠れて前方に広がる薄闇に目をこらした。

(んーっ)

薄闇から闇をまつて近づくものがある。

あるいは化け猫

「チリン」

小気味のいい鈴の音が響いた。

(まぢがいない、とらだー)

確信した千代は、道の真ん中に出て、両手を大きく横に広げ、とつせんぼをした。しかしトラは歩みを止めず、「チリン」「とーっ首を振った。まるで、闇をまつて近づくと山吹色の大猫を指差し、

「おまえは ちよのことはが わかるのか」

と強い声で訊いた。トラは一間ほど前まで近づいてやつと足を止め、千代の顔を見て、「チリン」と鈴を鳴らした。

「そつか、わかるのか。ならごめん。このまえ おまえみたいな でぶつちよは のろまだから きらいだつていつたけど、おまえは でぶつちよだけどのろまじゃなかつたもんね。とら おまえだけは きらいじゃないよ」

と千代がトラに話しかけると、再度トラは「チリン」と鈴を鳴らした。

「お千代さま、やはりこの大猫は人の言葉がわかり

ましたな。長く生きたからでしょうか。あるいは天普和尚さまがおりおり話しかけてやつておつたからでしょうか」

と小十郎がいつと、トラが口から、「ふおっふおっふおっ」と音を出した。まるで天普和尚がときおりみせる高笑いのように。

「いやあ、これはまいつた」と小十郎が頭をかき、千代は膝を折つてトラに話しかけた。

「おまえ、あたいのいえに きていいよ。どうじょうのにわのまつに のぼつてもいいよ。ははづえにも おじいさまにも はなしとくから だいじょうぶだよ」

トラは千代の目をまっすぐ見てから、「ニャーオ」と一声ないて千代の脇を通りすぎ、やなぎ端の向こうの闇に消えた。

「お千代さま、たいした猫ですね。化け猫になる一歩手前、いやすでに化け猫かも」

「ほけね」でも ちよは とらが すきじゃ。やしきにくるなら だいだいだいすきじゃ」

また雪が降った

夜半、江戸の町にまた雪が降った。翌朝、千代が縁側の雨戸を開けると、庭の地面は雪でうもれていたら。なにものにも踏まれていない、きれいな雪だった。

(こららは「こなかつたな」)

(あのとときは「なにゆえ きたのじゃ」)

千代の心に疑問が湧いた。

剣士桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から入ってきた千代が、

「じゅもんじゅう、せんじゅうのとらはなぜ どのじゅうの にわの まつのき」のぼっていたのだらう」と訊いた。

「はて、なぜでありましょう。なにかを追いかけたのじゅうか」

「えだのこえに」うじかんであったら」

すると天普和尚が、ふふふおつと笑って、

「トラが追いかけるかは知らんが、近ごろ、めずらしげに見ておるのは、ふつくら雀じゃ」

ふつくら雀

千代は天普和尚に尋ねた。

「ふつくら雀は、寒くなるとからだの羽毛をもち上げ、毛のあいだに空気をふくませる。人は寒いと綿入りの半纏を羽織るが、そのようなものじゃ。羽根をもち上げるとふつくら丸くなるから、ふつくら雀と呼んでおる」

小十郎がいぶかしげに訊いた。

「養生きのトラにうって、冬、身をふくらませる雀は、見慣れた姿でありまじゅう」

「そつなのだが、このあたりには一羽だけ、ここのほが大きくまん丸になる雀があつてな、トラはその雀が寺の裏庭に来ると刻を忘れて見つめておるわい。とついで、何ゆえ、そのふつくら雀を尋ねられ

「獲物を狙っていたのかもしれません」

「えものとは なんじゃ」

「枝に登っていたとなれば、空を飛ぶ雀とか」

「すすめか。とらの すばやいこまなら、すすめかをつかまえることが、できるかもな」

「ただ、飛ぶ雀を捕るのは容易なことではありません。捕まえるといつよりも興味をいだいて、見ていたのかもしれません」

「どんな きょうみじゃ」

「珍しい雀だったのではありませぬか」

「どのよう」めずらしい、すすめじゃ」

「はて、それは」

「じゅもんじゅうにある、すすめか」

「さて、それは」

「じゅもんじゅうでは、うちがあかん。こんじゅうのおしゅう」きじゅう」

小十郎をしたがえて金剛寺を訪ねた千代は、庫裏の玄関で天普和尚に尋ねた。

「おしゅうさま、おてらに」とらが、おいかけるめずらしい、すすめがおりますか」

たのかな」

と天普和尚が尋ね、千代がこたえた。

「せんじゅうのあさ、なぜか、どつじゅうの まつに、とらが、あつてな。そのわけを」じゅもんじゅうは、とらが、めずらしいすすめを、おいかけたからかもしれぬと、もうした。それで、そのようなすすめがあるのか、おしゅうさまに、ききに、きたのじゃ」

「ふうむ、トラは、あの雀を追いかけたかもしれんな。あの雀は、よほど寒がりなのか、飛ぶときもふつくら丸いままでな。羽をせわしく動かして、ゆつくりゆつくり進むのじゃ。まつこと、世にも珍しい雀じゃぞ」

「おしゅうさま、ちはは、そのすすめが、みたい。てらに、あけておくれ」

「おお、よいぞ。奥の部屋じゃ」

天普和尚は千代と小十郎を奥の八畳間に導いた。するとそこでは、藍色の長座布団の上で、仰向けになつてトラが眠っていた。

天普和尚が障子戸を静かに引き開けた。庭を囲む白土塀の縁まで枯草が折れ倒れ、一畳ほどの池が、

青い空を映していた。

「目の前の池はスズメたちの水飲み場じゃ。シメヤヒヨドリ、メジロもくるぞ」
と和尚が教えた。しかし、今、そこにスズメはおろか、他の鳥の姿もなかった。

来た！

「和尚さま、スズメたちはいつも、いつごろに姿をあらわすのでしょ」
と小十郎が訊いた。天誉和尚はふふおっと笑つと、「きまってはおらん。スズメの勝手じゃ」といった。そこで千代が、「なら、「」で、まっても よいかえ」と訊いた。和尚はすぐさま、「よいが、いつになるか わからんぞ」と、その時、トラが目を開き、身をよじって立つと、「背伸びをした。天誉和尚が顔をゆるめ、二人にささやいた。」
「兩人とも動かず静かに見ておれ。スズメたちがく

るぞ。トラは、それがわかるのじゃ」

はたして一羽のスズメが池の右端に舞い降りた。と思つたら、チチチチツと鳴き声も騒々しく二、三十羽のスズメが黒い塊となって池の周りに舞い下りてきた。そして思い思いに枯れ草の実をついばみ、池の水を呑む。

するとトラが音もなく千代の前に歩き出た。そして身を伏せ、そのまま動かさない。

その時、フィフィフィッ…とせわしげな羽ばたき音が近づいてきた。千代が音に目をやると、リングの大実ほどの茶色い塊が、左と右に突き出た羽根を小刻みにはばたかせて、ゆっくりゆっくり池に下りてくる。そして水面から三尺ほどのあたりで右へ動き、塀脇にあるサンシュユの、中ほどの枝に止まった。まっことぶっくらの、ぶっくらは雀である。

（なるほど、見るからにかわった雀だ。トラならずとも、興味をいだくはずだ）
と小十郎は思い、千代は、

（かわいいなあ。つかまえないなあ）

と思った。するとそんな千代の思いを感じたかのよ

うにトラが千代をふりかえり、目を細め、小声でふおふおふおっと笑つたのだ。

まるで、捕まえられるなら捕まえてくらんとでもいっしょに……。…。

千代は、横をむいてフンと鼻を鳴らした。

半刻後、スズメは去り、二人は寺を辞した。